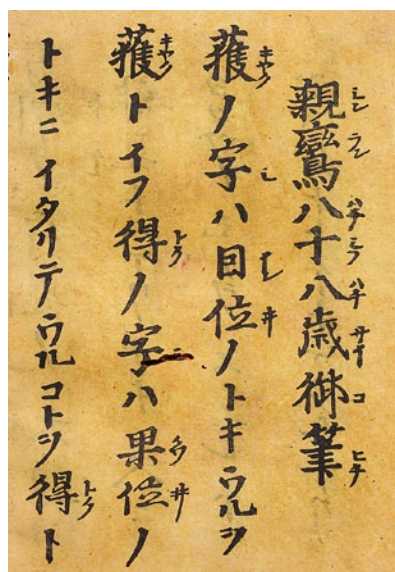




1	2	3
4	5	6
	7	

1. 茶地山市紋革羽織（部分）江戸時代
2. 緑釉線彫名号文野花立 布志名 江戸時代 高 33.7cm
3. 朱地金文字旗指物「いしい善六」 江戸時代 縦 89.7cm
4. グレゴリオ聖歌楽譜 ヨーロッパ 17世紀
5. 色紙和讃（天文版）「正像末和讃」（部分）室町時代 1553年
6. 文字絵 信 朝鮮時代 19世紀 横 33.0cm
7. 六字名号 一遍 鎌倉時代 13世紀 縦 32.6cm



月曜休館（祝日の場合は開館し、翌日休館）
10:00-17:00（入館は16:30まで）
入館料：一般 1,100 円 大高生 600 円
中小生 200 円
西館公開日（旧柳宗悦邸）：
会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、
第3土曜日（入館は16:00まで）
京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩7分
〒153-0041 東京都目黒区駒場 4-3-33
Tel. 03-3467-4527



文字の美

— 工芸的な文字の世界

2015年1月10日(土) - 3月22日(日) 日本民藝館

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館

文字の美 ―工芸的な文字の世界

当館創設者・柳^{やなぎむねよし}宗悦（1889－1961）は、「文字の美」に関しても独自の見方と考え方を持っていました。柳は既成の価値観や書道の慣習などには縛られず、自身が美しいと感じた文字を日本民藝館のために蒐集し、その美が生まれる由縁や特質を解明していったのです。

文字の美を捉えるとき、柳はそこに二つの大きな「見方」の基礎を置きました。第一の基礎に、美しい文字は個人の性^{さが}を越えていることを挙げています。ここでの個人とは自我を指します。自我に執着すればそれは作為として敏感に反映され、美から遠のくと述べました。従って個人に属さない文字や社会共有の公的な文字は、より美と交わりやすく、また非個人の文字が美しくなる要素は、伝統への帰着や文字の間接化であると説明しています。間接化については拓本を例にとり、個人による生^{なま}の文字が石に彫られ、風雨という自然からの磨耗を受け、続いて紙に転写される拓の効果を丁寧に語りました。ちなみに個人の文字を書いた代表には、中国・東晋時代の王羲之を引いています。しかし羲之の書が漢代や同じ六朝期^{りくちようき}に刻まれた碑文の美しさに及ばないこと、くわえて羲之から書の墮落が始まったことを指摘しました。技巧に長けている文字と、美に深まる文字とを同一視しないように促したのです。書聖と崇められる王羲之へのこの発言は、柳独自の文字観をよく表わしています。

そして、第二の基礎には文字の模様化を示しました。形や線の無駄を省き煮つめられたもの、姿を単純化し結晶化されたもの、型にまで極まったものを文字の模様化と呼んだのです。かさねて柳は模様と工芸との関係に言及し、「美しい書にはどこか模様としての美しさがある。此の意味で凡ての美しい書は工藝的に美しいと云っていい。文字に工藝化が来ないと美しくはならない。美しければどこか工藝的な所がある」（「書論」1937年）と説き、文字が用に発する工芸の一分野であったという本来の性質も記しました。

本展では当館の所蔵品から、先に触れた拓本を始め、絵画・経典・陶磁・染色・木工などに遺された間接の文字を主に展観し、さらに肉筆でありながら「自我の傷」を免れた様々な文字も併せて紹介します。

これらの文字は人種や国を選ばず、過去と現在をも超えています。名も知れぬ工人達が繰り返し綴^{したた}った文字、仏への信心が形となった文字、市井の民が無心に認めた文字。文字は法に則り、いつしか美醜なき美の頂きに辿りつきました。柳が讀えた「工芸的な文字の世界」をご高覧下さい。

記念講演会 書の工芸性を考えるための若干のヒント

〔講師〕松井健（東京大学東洋文化研究所教授）

2015年3月14日(土) 18:00-19:30

料金・300 円（入館料別） 定員・100 名（要予約）

展示室 1 階

〔玄 関〕文字の美 ―工芸的な文字の世界

〔第1室〕流し掛けの陶器

「流し掛け」は、器の素地や化粧土、または施釉された上から、柄杓^{ひしやく}などで加飾する技法です。流し方は様々ですが、釉薬が器の面に沿って自然に流れる作用が加わり、変化に富んだ模様を示します。日本で、とりわけ民窯で多用された「流し掛け」による陶器を展示します。

〔第2室〕日本の木漆工品

展示期間：2月7日～3月22日（2月6日まで閉室）

当館所蔵品の中から、虹色に輝く貝殻の内側部分を器の表面にはめ込んだ螺鈿や、卵の殻で模様をつけた卵殻貼の箱、根来塗の護摩壇や湯桶、鎬文の盆など、さまざまな技法を使って人々の暮らしを彩った木漆工品の優品を紹介します。

〔第3室〕日本の染織

江戸時代後期から昭和初期までの日本各地の着物や裂を展示します。越後上布や大和緋などの麻緋、黄八丈などの絹織物、久留米や山陰の木綿緋、木綿と屑絹糸で織った素朴な丹波布、絹や木綿を裂いて緯糸にした裂織、そして絞染など素材も色柄も様々です。

展示室 2 階

〔大展示室・第4室〕 文字の美 ―工芸的な文字の世界

〔第1室〕朝鮮時代の陶磁器

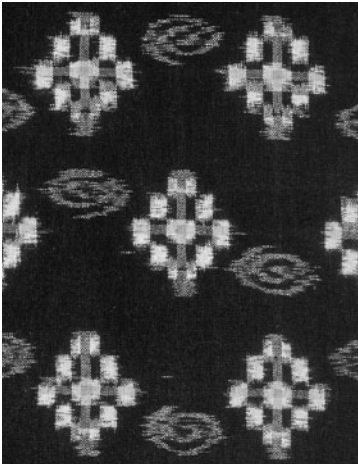
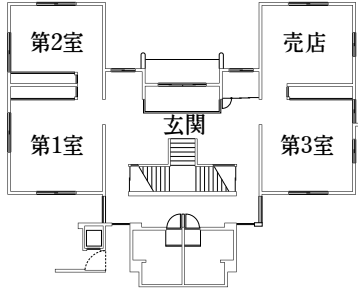
白泥などの化粧土で装飾した瓶・俵壺・茶碗や、黒釉や飴釉^{ていしゆ}を施した扁壺・瓶・碗などの陶器。磁器の表面に染付、鉄砂、辰砂の技法で絵付けした、壺・瓶・鉢などの磁器の数々。さまざまな加飾方法によって彩られた、朝鮮陶磁器の魅力を紹介します。

〔第2室〕紙の工芸 ―紙布、紙子を中心に

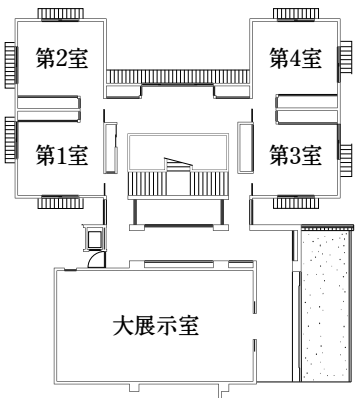
和紙の丈夫さを活かした工芸の一つに紙の衣類が挙げられます。紙布^{しふ}は細く切った和紙を撚った糸の織物で、紙子^{かみこ}は和紙をそのまま用いた紙衣のことです。本展示室ではこれら衣類の他に沖縄の紅型染の型紙や、内山光弘氏考案の折り紙・花紋折り等を交え、日本の紙工芸を紹介します。

〔第3室〕文字の美 ―工芸作家たちの文字表現

民芸運動に携わった工芸作家たちの作品にも、「文字」がモチーフとされた作品群が残されています。第3室では、棟方志功（版画）をはじめとして、バーナード・リーチ（陶磁）、富本憲吉（陶磁）、芹沢鈇介（染色）らの作品に見る、「文字」が表された工芸を紹介します。



〔1階第3室〕木綿紺地色入子供着物(部分)
久留米緋 明治時代



〔2階第3室〕色絵我孫子風景図鉢(部分)
バーナード・リーチ 1918 年



水の字に魚自在横木 飛騨地方
江戸時代 横 40.0cm



仏花器 西教寺銘（部分）
桃山時代 1576 年



鉄砂文字入壺 即石間朱
朝鮮時代 19 世紀 高 29.5cm



螺鈿文字文箱 朝鮮時代 19世紀 縦24.2cm